Kyot.Prot.N.1/2020

2020 年　司教年頭書簡

『すべてのいのちを守るため』

～教皇フランシスコの呼びかけに応えて～

カトリック京都司教
パウロ大塚喜直

■はじめに

2019 年の教皇フランシスコの日本司牧訪問（11 月 23 日～26 日）のテーマは、『すべてのいのちを守るため』でした。これは、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』の中で発表された「**被造物とともにささげるキリスト者の祈り**」の中の最後の段落にあります。

おお、主よ、**すべてのいのちを守るため**、よりよい未来をひらくため、あなたの力と光でわたしたちをとらえてください。正義と平和と愛と美が支配する、あなたのみ国の到来のために。あなたはたたえられますように。アーメン。

この祈りは、キリスト者が、イエスの福音が示す、被造界についての責任を引き受けることができるようにと願う祈りです。

「あなたに、話がある」。教皇は日本にいるすべての人々に、神の愛といのちの福音を、さまざまな場面でお話しくださいました。わたしたちは教皇のメッセージを心にとめ、味わい、祈りながら、『すべてのいのちを守るため』の使命を果たしてきたいと思います。そこで、今年の年頭書簡は、同じく回勅『ラウダート・シ』の中にある「**わたしたちの地球のための祈り**」を黙想したいと思います。これは、全能の創造主である神を信じるすべての人とささげる祈りです。

〔わたしたちの地球のための祈り〕

全能の神よ、
あなたは、宇宙全体の中に、
そしてあなたの被造物のうちでもっとも小さいものの中におられます。
あなたは、存在するすべてのものを
ご自分の優しさで包んでくださいます。
いのちと美とを守れるよう、
あなたの愛の力をわたしたちに注いでください。
だれも傷つけることなく、兄弟姉妹として生きるために、
わたしたちを平和で満たしてください。
おお、貧しい人々の神よ、
あなたの目にはかけがえのない
この地球上で見捨てられ、忘れ去られた人々を救い出すため、
わたしたちを助けてください。
世界を貪るのではなく、守るために
汚染や破壊ではなく、美の種を蒔くために
わたしたちのいのちをいやしてください。
貧しい人々と地球とを犠牲にし利益だけを求める人々の心に触れてください。
それぞれのものの価値を見いだすこと、
驚きの心で観想すること、
あなたの無限の光に向かう旅路にあって
すべての被造物と深く結ばれていると認めることを、

わたしたちに教えてください。
日々ともにいてくださることを、
あなたに感謝します。
正義と愛と平和のために力を尽くすわたしたちを、
どうか、勇気づけてください。
（教皇フランシスコ『回勅　ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に』208 頁）

1.　創造主である神

《全能の神よ、あなたは、宇宙全体の中に、そして、あなたの被造物のうちでもっとも小さいものの中におられます。》

『神さまといつもいっしょ』という讃美歌があります。「朝が来て、夜があける、太陽のプレゼント」と、自然の営みの中に神を認め、「ありがとう、神さま」と感謝の気持ちを歌います。アシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」の「ラウダート・シ」（主はたたえられますように）と同じ心です。詩編は、「天は神の栄光を語り、大空は御手の業を示す」（19・1）とうたい、パウロは、「神の永遠の力と神性は、天地創造このかた、被造物において知られている」と説きます（ローマ 1・20）。神は壮大な宇宙の営みを司るとともに、わたしたちの地球に見られる小さな生きもののいのちの営みにも働きかけておられます。

キリスト者は、「神は創造主である」と信仰宣言します。すべてのいのちは神の創造によるものであり、神のわざ、神の愛のたまものです。そして、天地創造の最後に人間を造られた神は、わたしたちをご自分にかたどって創造されました（創世記 1・27）。ここに、人間のいのちの尊厳を説明する絶対的な根拠があります。しかし、悲しいことに、毎日のように人のいのちが奪われるニュースが届きます。わたしたちは、いつの間にか、いのちの尊さに対する感覚が麻痺し、いのちが奪われることへの痛みや憤り，本来持っていたはずのいのちを大切に思う心を失いかねません。創造者である神を認めないなら、人のいのちの価値が分からなくなっても当然です。わたしたちキリスト者は、いのちの神秘を伝えるために、創造主である神への信仰を土台にいのちの大切さを確信して、『すべてのいのちを守るため』、働かなければなりません。

2.　神の優しさ

《あなたは、存在するすべてのものを、ご自分の優しさで包んでくださいます。》

聖書に見る神の「優しさ」とは、寛大で温かいといった日本語のイメージ以上に、いみじくも「人を憂う」と書く字のとおり、もろく弱い人間が滅びることを決して望まれない神の意志とその配慮を指します。世界は、この神の配慮という優しさで包まれています。わたしたちは生活の中で、どれほど神の優しさを感じているでしょうか。日々の暮らしに追われ、自分の存在を根本的に見つめ直す余裕がありません。しかし、いざ生活に困窮したり、大病を抱えたり、精神的に行きづまると、自分を根本的に支えるものが見当たらず、生きる意欲までも失ってしまいます。誰にとっても、いくつになっても、生きる意味と目的を識別し、人生を正しく方向づけることは必ずしも容易ではありませんが、信仰によって神を見出すと、自分の生きる本当の意味と価値が見えてきます。神が一人ひとりをいつくしみ、愛しておられることに気づくからです。

神の優しさに包まれていることに気づき、生きる力と喜びを感じると、人は自ずと、人に対しても、自然に対しても、優しくなれるものです。このような態度こそ、愛と呼ばれるものです。愛は、他者への開きであり、他者を利用しようとも、所有しようともせず、その存在そのものを喜びます。愛は、さらに他者の独自性と自分との相違を認めつつ、他者との共存を望み、他者を大切にします。

3.　愛の力

《いのちと美とを守れるよう、あなたの愛の力をわたしたちに注いでください。》

パウロは言います。「どんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（ローマ 8・39）。被造界のすべてのいのちと美を守る原動力は、この神の愛です。愛は、いのちを育み、成長させる力、エネルギーや情熱となって人を動かします。人は、愛の炎でいのちを燃やすとき、他者のいのちを守る生き方を始めます。その模範となる生き方をした一人が、コルカタの聖テレサ（マザーテレサ）ではないでしょうか。1948 年 38 歳の時、ロレート修道会を出たテレサは、コルカタのスラム街に住んでいる貧しい人や孤児たちのための奉仕活動を、たった一人で始めました。彼女を動かしたのは神の愛であり、後に創立された会は「神の愛の宣教者会」と名付けられました。同会の目的は、飢えた人、裸の人、家のない人、体の不自由な人、病気の人、必要とされることのないすべての人、愛されていない人、誰からもケアされない人のために働くことです。教皇フランシスコはマザーテレサの列聖式の説教でこう述べています。「愛のわざにとって代わるものなどありません。他者に尽くすために自らをささげる人は、たとえそのことが人々に知られなくとも、神を愛する人です。しかし、キリスト教的な生き方は、人々のニーズに手を差し伸べることだけではありません。主がわたしたちに与える責務は、愛への召命です。無償の愛はどんなイデオロギーや制約にも縛られず、言語、文化、人種、宗教の違いに関係なく、すべての人に無償で与えられます」。

4.　いのちと平和

《だれも傷つけることなく、兄弟姉妹として生きるために、わたしたちを平和で満たしてください。》

神にかたどって造られ人間のいのちは、あくまで神から与えられたものであって，わたしたち自身のものではありません。ですから，わたしたち人間には、自分のいのちであれ，人のいのちであれ，傷つける権利はありません。ましてや殺す権利などないのです。わたしたちが生まれてきたのは、神に出会い，神に愛されるためです。だから、わたしたちは神に愛される同じこどもとして、お互い大切に思い、誠実な態度で接し、心を開いて交わります。このような「いのちといのちのつながり」を生きることが、神が望む平和です。教皇フランシスコの考えの基本は、「あらゆるものはつながっている」という視点です。その意味で、現代人は、いのちはすべてつながっているという感覚をもっと大切にしなければなりません。わたしのいのちは、わたしのいのちだけで存在しているのではありません。地球のさまざまな生物のいのちとつながっています。貧しい人のいのちともつながっています。他の宗教の人、他の国の人、他の民族の人と全部つながっています。病人や、高齢者や、こどもたちともつながっています。このいのちのつながりを生きることが、教皇が言う「エコロジカルな使命」と言えます。環境の問題は、いわゆる環境だけの問題ではありません。貧しい人の問題、戦争と平和の問題、生まれる前の胎児のいのちの問題まで、すべてはつながっているのです。聖ヨハネ二十三世教皇は回勅『地上の平和』で、「地上の平和は、神の定めた秩序が全面的に尊重されなければ、達成されることも保障されることもない」と述べました。神の定めた秩序とは、このいのちのつながりのことであり、いのちのつながりの完成が、平和です。平和は、神の創造のわざの完成であり、平和のための働きは、神の創造のわざに協力することです。この平和を乱す戦争は、1981 年聖ヨハネ・パウロ二世教皇が平和宣言したとおり、人間のしわざであり、人間の生命の破壊であり、戦争は死なのです。

5.　貧しい人に寄りそう

《おお、貧しい人々の神よ、あなたの目にはかけがえのない、この地球上で見捨てられ、忘れ去られた人々を救い出すため、わたしたちを助けてください。》

21 世紀に入ってから、日本に限らず世界各地で、気候変動により豪雨や台風などの甚大な自然災害によって、多くのいのちが奪われ、家や財産を失い、困窮生活を強いられている人たちが後を絶ちません。しかし、神にとって、貧しいものとは、困窮者に限りません。信仰を失い、神は存在しないかのように生きる人々も、価値観も理想も見失った若者たちも、危機にひんした家庭の人々も、病者も、受刑者も、難民も、移住者も、孤独な高齢者も、神が寄りそう人々なのです。

教皇フランシスコは、地球は「皆の共通の家」だから、同じ家族の一員として、世界中のすべてのうち捨てられた人々の嘆きに耳を傾けようと呼びかけます。パウロは言います。「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」(一コリント 12・26)。教皇は、「貧しい人のため、教会は貧しくあってほしい」と言われます。それは、神の存在に気づき、神が人生に寄り添ってくださることをあかしできるのは、貧しい人だからです。教会は、貧しい人の生活がもっている救いをもたらす力を認め、彼らを教会の歩みの中心に置くという新しい福音宣教に招かれているのです。(参照『福音の喜び』N.198)

6.　環境危機と次世代への責任

《世界を貪るのではなく、守るために、汚染や破壊ではなく、美の種を蒔くために、わたしたちのいのちをいやしてください。》

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の津波、その後の福島の原発事故が、改めて、科学と人間のいのちの持つ意味について考えさせる契機となりました。近年は、海洋汚染となるプラスチックごみが緊急の課題となっています。人間の生産と消費活動によって、地球が急速に侵されています。この危機を回避するために、日常生活で自分たちの身の回りから、地球にやさしいことを実践していかなければなりません。過剰な消費社会の時代にあって、神のまなざしで現実を見つめてみると、神の目における完成からはほど遠いのが現実です。神がたまものとして与えられたこの地球といのちを守り抜くのだという価値観が、社会の中心から排除されているのです。だから、教皇フランシスコは問いかけます。「わたしたちの後に続く人々、また今成長しつつあるこどもたちのために、わたしたちは一体どのような世界を残していきたいのでしょうか」(回勅『ラウダート・シ』N.160)。この質問は、ただ環境に関してのみ問われているのではなく、被造物の存在意義そのもの、また社会生活の根底にある価値に対する根本的な問いかけです。教皇が言われるように、世界は、環境危機と社会危機という別個の二つの危機ではなく、一つの複雑な危機に直面しているのです。現代人の生産活動と消費生活は、地球を犠牲にし、未来の人類に使い捨てのゴミを生産しているのです。わたしたちは、次の世代のために、美の種を蒔く責任をどのようにはたすことができるか、真剣に考えなければなりません。

7.　エコロジカルな回心

《貧しい人々と地球とを犠牲にし、利益だけを求める人々の心に触れてください。》

「利益だけを求める人」とは、だれのことでしょうか。自分以外の他人や、一部の企業人のことと思い、わたしたちは全く関係がないのでしょうか。この世で生きている間は、物質的な豊かさと快楽を追い求め、自分の幸せだけを追い求めようとする傾向があることを、誰も否めません。したがって、『すべてのいのちを守るため』という標語を掲げても、一人ひとりが謙虚に回心を続けていく必要があります。教皇フランシスコが呼びかける４つの「エコロジカルな回心」を思い起こしましょう。①神とのかかわりの回心、②他者とのかかりの回心、③自然とのかかわりの回心、そして④自己とのかかわりの回心です。貧しい人の叫びは、自己中心で、他人に無関心なわたしたちを、回心へと招きます。教皇は、貧しい人の叫びは、ご自分に自らをゆだねる人々を決して見捨てない神の介入を希望する叫びだと言われます。(参照 2018 年 第二回「貧しい人のため

の世界祈願日」教皇メッセージ)。
パウロは言います。「喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣き、互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません」(ローマ 12・15～16)。わたしたちは、自己中心の思いを断ち、おごりを捨て、無関心という壁を壊し、苦しんでいる人々のところへ行き、共感の輪を社会に広げていくのです。教皇は、2019 年 5 月 7 日に 90 歳で亡くなった、知的障害者のためのラルシュ共同体の創始者である、ジャン・バニエ氏の葬儀にメッセージを送り、「神は、キリストを介して、わたしたちのすべての弱さをご自分に引き寄せられ、ジャン・バニエは、そのキリストと一致して生きることを求めました。彼は、拒絶されがちな最も弱い人々が、宗教や社会的立場を超えて、兄弟姉妹として認められ、受け入れられるよう尽くしました」と述べられました。

8.　道、真理、いのちであるキリスト

《それぞれのものの価値を見いだすこと、驚きの心で観想すること、あなたの無限の光に向かう旅路にあって、すべての被造物と深く結ばれていると認めることを、わたしたちに教えてください。》

神が創造した人間に与えたいのちとは、神とのつながりの中にあるもので、最終的に神に帰っていくいのちです。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」(マタイ 16・25)。イエスは、同じ命という言葉を使いながら、一方では肉体的な生命のことを言い、それを守ろうとして、それだけを見ていたら、神とのつながりの中にあるもっと豊かな「いのち」を見失うことになると教えます。イエスの十字架の目的は、肉体の生命が滅びても、それを越える永遠のいのちを人間にもたらすことでした。「わたしは世の光である。わたしに従う者は、暗闇の中を歩まず、命の光を持つ」(ヨハネ 8・12)。「すべてのいのちを守る」ことを完全に成し遂げたのが、救い主イエス・キリストです。神を愛し、人々を愛して、十字架に付けられて死に、復活されたキリスト、このキリストの生き方に倣うことこそ、危機に瀕しているわたしたちのいのちを救い、わたしたちの人生を永遠のいのちに導くのです。実にキリストこそ、「道、真理、いのち」なのです。

9.　ともにいてくださる神への感謝

《日々ともにいてくださることを、あなたに感謝します。正義と愛と平和のために力を尽くすわたしたちを、どうか、勇気づけてください。》

神への感謝とは、儀礼以上の、人間が神の前で罪を告白し、信仰を告白するという意味があります。罪びとであるわたしたちは、神のあわれみと寛大さに心を開き、罪を告白し、ゆるしを願う祈りが、感謝のはじまりです。日々、神の愛と恵みによって生かされているわたしたちは、地球を蝕んだことを反省し、傷ついた世界の痛みに無関心にならず、そのいやしのための責任を引き受けていく覚悟が求められています。

教皇フランシスコは、「時のしるし」を見極めながら、いのちの大切さとその尊厳を守るように、わたしたちに語りかけてくださいました。日本も世界も、日々社会の状況は大きく変化し、いのちに関わる問題も、新しい課題も多岐にわたります。家族にまつわる問題では、夫婦、性と生殖、親子、高齢化社会のひずみ、さらに、生と死をめぐる問題では、出生前診断、障害者、自死、安楽死、死刑、生命科学、脳死と臓器移植、ヒト胚、人間クローン、遺伝子治療、環境問題などです。

日本の教会の使命は、日本で生きるすべての人々のあり方と、いのちに関わる現代の複雑な諸問題への取り組みに、福音的な光を投げかけることです。神の光に向かって歩んでいくためのチャレンジを呼びかけることです。そのために、全能の父である神が、わたしたちを勇気づけてくださるよう、全被造界の女王であるマリアの取次ぎによって祈りましょう。

〔被造物とともにささげるキリスト者の祈り〕

父よ、
あなたが造られたすべてのものとともに、あなたをたたえます。
すべてのものは、全能のみ手から生み出されたもの。
すべてのものはあなたのもの、
あなたの現存と優しい愛に満たされています。
あなたはたたえられますように。

神の子イエスよ、
万物は、あなたによって造られました。
あなたは母マリアの胎内で形づくられ、
この地球の一部となられ、
人間のまなざしで、この世界をご覧になりました。
あなたは復活の栄光をもって、
すべての被造物の中に今日も生きておられます。
あなたはたたえられますように。

聖霊よ、あなたはその光によって、この世界を御父の愛へと導き、
苦しみにうめく被造物に寄り添ってくださいます。
あなたはまた、わたしたちの心に住まい、
善をなすよう、わたしたちを息吹かれます。
あなたはたたえられますように。

三一の主、
無限の愛の驚くべき交わりよ、
わたしたちに教えてください
宇宙の美しさの中で、
すべてのものがあなたについて語る場で、
あなたを観想することを。
あなたがお造りになったすべての存在にふさわしい、
賛美と感謝を呼び覚ましてください。
存在するすべてのものと深く結ばれていると感じる恵みをお与えください。

愛の神よ、
地球上のすべての被造物へのあなたの愛の道具として、
この世界でのわたしたちの役割をお示しください。
あなたに忘れ去られるものは何一つないからです。
無関心の罪に陥らせず、
共通善を愛し、弱い人々を支え、
わたしたちの住むこの世界を大切にできるよう、
権力や財力をもつ人々を照らしてください。
貧しい人々と地球とが叫んでいます。

おお、主よ、
すべてのいのちを守るため、
よりよい未来をひらくため、
あなたの力と光でわたしたちをとらえてください。
正義と平和と愛と美が支配する、あなたのみ国の到来のために。
あなたはたたえられますように。
アーメン。

（教皇フランシスコ『回勅　ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に』210 頁）